

## 飛騨農林事務所の普及活動状況（飛騨版）

令和元年 12 月 25 日現在

### 今月の重点活動

#### ■担い手 研修生と先輩農業者との意見交換会を開催～第6回飛騨就農支援塾～

飛騨地域農業再生協議会（担い手プロジェクト）では、12月4日（水）に飛騨就農支援塾として先輩農業者との意見交換会を開催した。

まず、飛騨野菜出荷組合長から産地を維持・拡大することの大切さや、経営者となる心構えについての講話があり、次に就農2年目と3年目の先輩農業者2名から就農時に苦労した点等の体験談が話された。

その後、支援塾の出席者25名、先輩農業者、支援機関職員で意見交換会を行い、将来の営農ビジョン、就農に向けての悩み等情報共有し、先輩農業者からアドバイスを受けながら活発な意見交換が行われた。

農業普及課では、研修生が悩みを抱え孤立することなくスムーズに就農し、早期に経営が安定するよう関係機関と連携し支援を行っていく。



【活発な意見交換で悩み解決】

### 多様な担い手づくり

#### ■担い手 飛騨地域では各選賞事業で上位入賞！

今年度の全国優良経営体表彰（担い手づくり（農地）部門）において、高山市就農支援協議会（支援チーム）が農林水産大臣賞に輝いた。

支援チームでは、高山市丹生川町の3団地を重点推進地域に定めうち2団地を園芸品目で就農する新規就農者の農地確保のための重点推進地域に定めてコーディネート活動を進めた結果、平成26年度から30年度に14経営体17名の新規就農者が中間管理機構から9.5haの連担した農地を借り受けて就農した。また、丹生川町の他の1団地では、既存の担い手や高齢農家の意向を調査して、集積・集約に取り組んだ結果、地域の担い手7経営体への集積率が29.6%向上して149%となった。

こうしたワンチームとして連携した積極的な活動が評価され、今回の受賞につながった。

農業普及課では、今後も関係機関と連携強化しながら、産地維持発展のために継続して支援していく。



【農林水産大臣賞を受賞された支援チーム】

## ■担い手 飛騨地域では各選賞事業で上位入賞！

今年度、飛騨地域では各選賞事業において入賞ラッシュである。日本農業賞では高山市の（株）和仁農園が岐阜県代表に選出され、今後、全国段階での入賞が期待される。大日本農会農事功績者表彰では、高山市の小林知明氏が緑白綬有功章を受章され秋篠宮殿下の御名により表彰された。全国優良経営体表彰では高山市就農支援協議会が農林水産大臣賞を受賞され、「全国農業担い手サミット in しずおか」にて寛仁親王妃信子殿下参列の元で表彰式が挙行された。その他、中日農業賞でも岐阜県代表として高山市の兀下大輔氏



【緑白綬有功章を受賞された小林氏】

が選出されており、上位入賞が期待される。これらの受賞は全て、農業者の高い知識や技術、日頃のたゆまぬ努力と共に、関係機関の強固な連携による多大な支援のたまものである。

農業普及課では、今後も関係機関と連携強化しながら、生産者の経営安定及び産地維持発展のために継続して支援していく。

## ■新規就農 新たに飛騨就農支援塾のトマトコースがスタート

飛騨地域農業再生協議会（担い手プロジェクト）では、飛騨及び下呂管内の長期研修生及び新規就農者を対象に座学研修「飛騨就農支援塾」を開催している。受講生の多くは就農後にトマトを生産するため、トマトに関する栽培技術や専門的な知識の習得を目的として、今年度から新たに「飛騨就農支援塾トマトコース」を開始した。



【トマトの基礎技術を説明する普及指導員】

講義ではトマトの植物生理や品種、作型、施肥・着果促進技術、病虫害防除など基礎的な内容について農業普及課の各担当から説明を行った。受講者は熱心に聞き入っており、講義終了後も講師に対して多くの質問をしていた。

今後は、管内の先進農家への視察や青年農業士を講師とした勉強会を予定しており、農業普及課では引き続き、新規就農者の経営開始並びに早期経営安定に向けて支援を行っていく。

## ■高山地方市場青果出荷組合 全体研修会でアシストスーツ体感

高山地方市場青果出荷組合では、毎年、組合員にとって重要なテーマを決めて全体研修会を行っており、今年は県が推進している「スマート農業」をテーマとした。スマート農業はIT技術を駆使して、農作業の自動化・省力化を進める政策だが、平坦地の経営向けの技術が多く、中山間で取り組める内容は少ない。そこで農業普及課が県庁農政課スマート農業推進室と連携して、農作業の身体負担を軽減する「アシストスーツ」を取り上げ実機を持ち込んでの体験を含む、スマート農業研修会を実施した。組合員が足腰のサポート、腕のパワーアシストの効果を実感し「すばらしい」との感想が聞かれる一方、重量・形状・価格などが課題として残った。農業普及課は今後地域にあったスマート農業を推進していく。



【軽いぞ！】

今後地域にあったスマート農業を推進していく。

#### ■ 4 Hクラブ “岐阜県 4 Hクラブ” で視察研修を開催

12月3日（火）、4日（木）に岐阜県の若手農業者組織“岐阜県 4 Hクラブ”で静岡県の「アグリビジネス研究所」と「ふじのくに茶の都ミュージアム」へ視察研修を行った。当日は24名の参加があり、高山4 Hクラブから18名が参加した。「アグリビジネス研究所」ではトマトのDトレイ栽培について説明を受けた。参加者は飛驒のトマト栽培と比べながら熱心に話を聞き、積極的に質問する等、意欲の高さが伺えた。今回は他地区との合同研修であったため「普段は他地区の人との交流がほとんどないので良かった」「交流する中で学べるのがたくさんあったのでいい勉強になった」など、参加者からの声がたくさんあった。

農業普及課では、今後も4 Hクラブの活動を通してクラブ員間の交流が活発になるよう支援していく。



【説明を受けるクラブ員】

#### 売れるブランドづくり

#### ■ 白川村 米のブランド化を目指し「おむすびカフェ」を開催

白川村は、村内産米のブランド化を実現するための準備段階として村内産米について話し合う「おむすびカフェ」を12月5日（木）に開催した。

当日は高山市を拠点とする米の流通業者を講師に「飛驒唯一の米問屋が考える白川村のお米の進むべき道」と題した講演が行われた。また、他産地米との食べ比べが行われブラインドテストで行われた投票で白川村産米は他産地に劣らない得票数を得て勇気づけられる結果となった。講演後には、白川村産米として販売する際のパッケージに記載する商品紹介のコメントについてグループ検討を行った。

農業普及課では、白川村と協力し白川村産米のブランド化の実現に向けて様々な取り組みを支援していく。



【米流通業者の講演】

#### ■ 水稲 第21回米・食味分析鑑定コンクール結果報告会

12月4日（水）、飛驒地域農業管理センターにおいて、千葉県で開催された第21回米・食味分析鑑定コンクール：国際大会の結果報告会が開催された。

昨年は、地元開催で盛大に行われ、過去最高の入賞者であった。今年は、最も権威のある国際総合部門のノミネート者は12名で、群馬県に及ばなかったものの、金賞数は6名と全国で最多となった。

次年度の栽培に向け、各研究会等の反省会や研修会を実施中で、農業普及課では今後も各地域における研究会等の活動支援を通して、良食味米生産に向けた栽培技術の向上を指導する。



【盛大に開催された報告会】

### ■夏秋トマト 高山トマト部会グループ活動反省会実施

高山トマト部会のグループ活動の活動反省会が11月28日（木）に行われた。

5つのグループの各リーダーが課題を持って取り組んだ成果を発表し、効果や導入実現性の有無について話し合った。

中でも安い肥料の導入試験は生育が慣行と遜色なく、部会への導入が進められる調査結果となるなど、商品リストに入れて進めることとなった。

農業普及課では反省会や個別相談で活動結果を詳しく伝え情報提供を行っていく。



【活動成果を発表】

### ■夏秋トマト 飛騨蔬菜出荷組合トマト部会 全体栽培研修会の開催

管内のトマト部会員約100名が集い、本年度のトマト生産販売状況を振り返るとともに、次年度の方針を確認する全体栽培研修会が12月2日（月）にJAひだ農業管理センターで開催された。

産地の重要な検討事項とされている栽培品種や産地としての長期安定出荷にむけた取り組みが方針として示された。また、各7地区で取り組まれた技術的課題の解決を図る「ローカルプロジェクト」の成果発表がなされた。

農業普及課からは、栽培状況の振り返りと新品種の特性に応じた管理支援、並びに被雇用者の確保対策について情報提供した。



【雇用アンケート結果の報告】

### ■ほうれんそう 各支部反省会で天候に左右されない生産を

12月、飛騨ほうれんそう部会の各支部において今年度の反省会が開催された。農業普及課では、今年度、夏期の出荷量が減少したことを受けて高温期の基本技術について呼びかけた。遮光資材の利用や、灌水方法等、現場における事例を紹介し、具体的な手法について説明した。また、灌水に関しては土壌の排水性も重要であるため、堆肥等の有機物の施用による土づくり等、土壌の物理性改善についても説明した。

農業普及課では、飛騨ほうれんそうの部会目標である「信頼（あてに）される産地」を目指して支援を継続していく。



【清見荘川地区での反省会】

## ■宿儺かぼちゃ **かぼちゃサミット in 飛騨高山を開催！**

「ざいをかぼちゃでまめにせんかなあ！（田舎をかぼちゃで元気にしよう）」をテーマに、「第2回かぼちゃサミット in 飛騨高山」が11月22日（金）に開催された。主催は、JAめぐみのかぼちゃ生産協議会及び宿儺かぼちゃ研究会で組織した第2回かぼちゃサミット in 飛騨高山実行委員会。

県外からの参加も含め約120名が出席するなか、県内及び県外の計5団体による産地紹介や、「地域を元気にするかぼちゃ作り」をテーマに飛騨農林事務所がコーディネーターとなり4名のパネラーによる意見交換会が行われた。

このサミットを契機に参加者が、より生産意欲を向上させ、かぼちゃ作りに活かしていくことが期待される。また、農業普及課では、今後も安定生産、品質向上等に向けた宿儺かぼちゃ研究会の取り組みを支援する。



【4名のパネラー意見交換会の様子】

## ■ほうれんそう **個別相談会に出席**

ほうれんそう生産がほぼ終わり、各生産者が今年のカイロを振り返るとともに来年のカイロに活かすため、吉城・丹生川地区で個別相談会が開催された。

今年は、夏場の出荷が落ち込んだことや、春・秋のハウレンソウケナガコナダニによる被害が大きかったことなどについての相談が多く、品種選択や防除、遮光などの栽培管理について指導を行った。

農業普及課では、今回聞き取った課題を踏まえ、来年度の現地巡回、栽培指導に活かしていく。



【来年に向けて指導した個別相談会の様子】

## ■りんご **第22回りんご『ふじ』品評会を開催**

12月5日（木）にJAひだ果実出荷組合協議会主催による『第22回りんご「ふじ」品評会』が開催された。また、本品評会は飛騨農林事務所も審査員として出席し、開催を支援した。

品評会には、管内の4果樹生産組合から合計36点が出品され、いずれも甲乙つけがたい素晴らしいりんごであった。

今年度は、霜害や雹害など、りんご栽培においては厳しい気象条件下であったが、品評会では、例年同様に高品質な果実が出展されていた。このことから、災害に対応して高品質な果実を安定生産するという、生産者の高い栽培管理技術が発揮されていることが伺われた。

今後、農業普及課では、生産者の更なる栽培技術向上や産地振興を支援していく。



【甲乙つけがたい高いレベルを競う審査】